

論 説

小崎治子の「癩短歌」を読む
——頂坡角から武蔵野へ——

星名 宏修

はじめに

第1節 楽生院時代

第2節 敗戦から引揚げまで

第3節 菊池恵楓園時代

第4節 多磨全生園時代

おわりに

(要約)

本論は「無名」の書き手であった小崎治子の生の軌跡を、彼女が残した短歌から検討するものである。植民地台湾で癩を患い、1930年代半ばに楽生院に入所した小崎は、1946年に熊本の菊池恵楓園に引き揚げ、その数年後に多磨全生園に転所した経歴を持つ。楽生院の『万寿果』に数多くの短歌を発表した彼女は、書き手の多くが男性入所者だった台湾の「癩文学」のなかで、数少ない女性の創作者だった。戦後、武蔵野の全生園で刊行されていた『山桜』に掲載された台湾時代を振りかえった5首の短歌は、特異な「引揚げ文学」とみなすことができる。

本論は小崎治子の「癩短歌」に焦点をあて、植民地で癩を病んだ者たちの日常生活と戦後の困難な引揚げ体験を考察した。彼女が1950年代に詠んだ「相会ふも永久に無からむ住み良かりし台湾去りて五年は過ぎ」「儂みし事もなくなり終戦の台湾偲びぬ吾引揚げし今日」という短歌には、楽生院での苛酷な体験は昇華され、植民地の崩壊ゆえに戻ることでできなくなった台湾の生活が「住み良かりし」ものとして表現されている。

はじめに

1950年8月、雑誌『山桜』に小崎治子の「再びは渡る事なき台湾の絵葉書手にして語るも懐かし」¹という短歌が掲載された。その2年後にも「儂みし事もなくなり終戦の台湾偲びぬ吾引揚げし今日」²という歌が同誌に載っている。これらの短歌に詠まれたように、彼女は台湾からの引揚げ者であった。

『山桜』は国立療養所多磨全生園の全生互惠会が刊行していた機関誌（1954年11月号から『多磨』と改題）である。1909年9月、全生園の前身である公立療養所第一区府県立全生病院が、「法律第十一号（「癩予防ニ関スル件」）」によって東村山村（現在の東村山市）に開設された。1941年7月に国に移管され、現在の名称となる。小崎は台湾にいた時に、すでに癩療養所の楽生院に入所していた。彼女が「懐かし」く「偲」んだ台湾の日々とは、どのようなものだったのだろうか。

筆者は「植民地台湾の「癩文学」を読む——宮崎勝雄のテキストを中心に——」³において、宮崎勝雄という「無名」の書き手に焦点をあてた。その作品が世間に知られることがなかっただけでなく、楽生院への入所に際して自らの本名を捨てることを求められた、いわば二重の意味で「無名」の存在だった。

小崎治子も宮崎と同じように「無名」の創作者である。しかしそのことは彼女の作品に独自性がないことを意味するわけではない⁴。書き手のほとんどが男性だった植民地台湾の「癩文学」のなかで、小崎は数少ない女性の表現者であった。1937年から44年までの長期にわたって、楽生院の『万寿果』に短歌を発表していたことも注目に値する。

台湾からの引揚げ後も、彼女は短歌の創作をやめなかった。『万寿果』に作品を寄せた入所者で戦後の創作活動が確認できるのは、小崎治子と後述する西羽四郎だけである。

日本の敗戦後、植民地や占領地から膨大な人々が内地に引揚げてきた。しかしその集団体験の「記憶」は、これまで十分に研究されてこなかったと朴裕河はいう。「[外地]に余剰人口(とされた人々)を送り出しながら、帰って来たあとも彼らの思いと記憶を忘却の彼方へ追いやっ」てきたのである。彼らが創作した「引揚げ文学」を読み直すことで、朴はかつては「植民者」だった「引揚者」の記憶に迫ろうとする⁵。

楽生院の記憶を詠んだ小崎治子の戦後の短歌も、特異な「引揚げ文学」といえるだろう。彼女の植民地期の創作については、断片的ではあるがこれまでも言及してきた⁶。本論文では小崎治子の戦前と戦後の短歌に焦点をあて、そこに描かれた癩療養所の日常を考察することで、「無名」の創作者であった彼女の「異口」を聞き取りたいと思う。

第1節 楽生院時代

台湾総督府の癩病政策や楽生院の概況は、すでに「植民地台湾の「癩短歌」を読む」で論じたので、ここでは要点を述べるにとどめたい。

浮浪癩患者の収容を目的とした「癩予防二関スル件」が1909年に内地で施行され、全生病院など5つの療養所がつくられた。

1930年12月、台湾総督府は台北州新莊郡頂坡角に楽生院を開設する。収容定員は100人。内地人4人、本島人2人の入所者から始まった⁷。この時、患者を収容する法的根拠となる「癩予防二関スル件」は、内地と法体系の異なる台湾には適用されていなかった。「法律なきハンセン病療養所の運営は、台湾総督府立だからこそ可能」⁸だったのだ。

1931年3月に浜口雄幸内閣はすべての患者の隔離収容を可能にする「癩予防法」を成立させた。「個々の患者にとって癩病が不治の病であったとしても、そうした患者のすべてが絶滅してくれさえすれば、国家にとっては癩病の治癒を意味」⁹したのである。同法は勅令によって1934年10月に台湾にも施行され、総督府は患者を収容する権限を手に入れた。

1934年5月頃、楽生院慰安会が機関誌『万寿果』を創刊。楽生院院長の上川豊は「癩文芸誌」¹⁰と称した。『万寿果』がいつまで刊行されたのかはわからないが、1944年1月の第10巻第2号まで確認できる。植民地期の台湾文学を代表する1930年代の『台湾文芸』や『台湾新文学』、40年代の『文芸台湾』『台湾文学』と比べてはるかに長寿の雑誌である。

現在確認できる小崎治子の作品を表1にまとめた。掲載誌の「万」は『万寿果』、「社」は『社会事業の友』、「山」は『山桜』の略。①から②⑥までが戦前の作品、②⑦から③⑥は引揚げ後に全生園

で詠んだ短歌である。1937年6月から52年10月までの15年間に、のべ131首の短歌と5句の俳句を発表した。

表1 小崎治子作品一覧（筆者作成）

	刊行日	掲載	巻号	タイトル	選者	備考
①	37/6/25	万	4-2	楽生歌壇	柴山武矩	7首
②	37/9/1	社	106	楽生院秀歌集	柴山武矩	1首
③	37/9/18	万	4-3	楽生歌壇	柴山武矩	4首
④	37/12/19	万	4-4	短歌選評	柴山武矩	4首
⑤	37/12/19	万	4-4	楽生歌壇	柴山武矩	6首
⑥	38/2/28	万	5-1	病者の歩み	柴山武矩	3首
⑦	38/6/26	万	5-2	楽生歌壇	柴山武矩	10首
⑧	38/12/18	万	5-3	御歌碑奉賛歌		2首
⑨	38/12/18	万	5-3	楽生歌壇	柴山武矩	5首
⑩	39/4/1	万	6-1	楽生歌壇	柴山武矩	8首
⑪	39/6/10	社	127	癩者の歌へる	松井卓夫	4首
⑫	39/6/22	万	6-2	楽生歌壇	柴山武矩	5首
⑬	39/6/22	万	6-2	楽生歌壇の人々（続）	蘇月生	2首
⑭	39/12/30	万	6-3	俳壇	山本孕江	3句
⑮	39/12/30	万	6-3	歌壇	柴山武矩	7首
⑯	39/12/30	万	6-3	楽生短歌会記録		3首
⑰	40/2/11	万	7-1	皇紀二千六百年を迎えて		少女寮長
⑱	40/2/11	万	7-1	短歌	由解夷	6首
⑲	40/2/11	万	7-1	興亜新春詠草	南風吟社	2句
⑳	40/8/31	万	7-3	短歌		8首
㉑	40/12/1			『療養秀歌三千集』	内田守人	2首
㉒	41/1/14	万	7-4	短歌（特輯文芸・佳作）	柴山武矩	1首
㉓	41/4/17	万	8-1	短歌	柴山武矩	10首
㉔	41/7/5	社	152	短歌 癩者の歌へる	山口充一	3首
㉕	41/7/23	万	8-2	短歌	柴山武矩	5首
㉖	44/1/4	万	10-2	短歌		3首
㉗	49/7/20	山	30-6	短歌	五味保義	2首
㉘	49/8/20	山	30-7	短歌	五味保義	2首
㉙	49/11/15	山	30-9	短歌（選外佳作）	五味保義	1首
㉚	50/4/1	山	31-4	短歌	五味保義	4首
㉛	50/6/1	山	31-6	短歌	五味保義	3首
㉜	50/7/1	山	31-7	五味保義先生歓迎春季短歌会記	山口信雄	1首
㉝	50/8/1	山	31-8	短歌	五味保義	2首
㉞	51/1/1	山	32-1	短歌	五味保義	4首
㉟	51/7/1	山	32-7	奉悼歌	武蔵野短歌会	1首
㊱	52/10/1	山	33-10	短歌	光岡良二 木谷花夫	2首

この表には長短2回の空白期がある。ひとつは㉕と㉖の間（細い罫線）の2年半だ。大東亜戦争期の『万寿果』は欠号が多いため、実際には作品を発表したのに目撃できていない可能性がある。もうひとつの空白期は㉖と㉗の間（太い罫線）の5年半に及ぶ。この間に小崎は台湾から熊本菊池恵楓園に引揚げ、さらに東京の多磨全生園に転所した。この2回の空白期について考察

するのも本論文の課題のひとつである。

1937年1月、柴山武矩が「楽生歌壇」の選者になる。総督府の嘱託として癩病問題に強い関心を抱いていた柴山は、若山牧水に短歌を学んだ歌人であった。短歌が「療養所に隔離されたまゝ余生を終らんとする患者」¹¹の慰安になると考え、楽生院から届く作品を毎月のように選歌、添削したのである¹²。

この年の6月に柴山が選んだ7首の短歌が、小崎治子の最初の作品となった（以下、小崎の短歌の引用は、リスト番号で示す。同一のリストから複数の短歌を引用する場合は、煩瑣を避けるため最後の作品に番号をつけた）。

病みつきてベツトに臥るこの人の悲しき話今日聞きにけり
 なつかしき故郷の母の手紙にはわが病むことは書かざりにけり
 癩病みて月日経にけり今ははや癒ゆるとはわが思はずなりぬ
 入院してはや幾年か静かなる心と今はなりて来にけり
 晴れし日は心も晴れて浮きうきと病もつ身も何かたのしき
 神経痛に悩める人の此の頃の明るき姿を不思議と思ふ
 人を避けこの昼過ぎをわれ一人炊事場に来て文書きにけり (①)

1937年6月の時点で「癩病みて月日経にけり」「入院してはや幾年か」と詠んでいる。楽生院の統計によると1935年末の収容患者は223人。うち内地人が23人で本島人が192人、そのほかに外国人（「支那人」）入所者が8人いた。内地人女性はわずか6人だが¹³、小崎はこの時点で収容されていたのではないだろうか。彼女たちの教育歴は「尋常小学校在学中及半途退学ノモノ」が2名、「尋常小学校卒業程度ノモノ」が3名、「高等小学校在学中及半途退学ノモノ」が1名。いずれにしても高い教育を受けたとはいいがたい¹⁴。

1930年代後半に北條民雄や明石海人らの「癩文学」が脚光を浴びた頃、全国の療養所では短歌の創作が最も盛んだった。「短歌は、五七五七七とシラブルを続けていけばとりあえず形にはなる。そのため、それまで文章を書いたことがなかった人々でも、比較的容易に短歌を作ることができる。そして、療養所の短歌サークルに入れば友人もできる。結核療養所や癩療養所で、いわゆる『療養短歌』が広まったのは、短歌を作ることの簡単さと療養所内に同好の仲間ができることに拠るところが大きい」¹⁵という松岡秀明の指摘は、十分な教育を受ける機会に恵まれなかった小崎にも当てはまるだろう。

楽生院でも1939年に「久しく中絶してゐた、楽生短歌会が、院御当局の熱心な御後援によりまして、職員田中先生を中心に再開され」¹⁶た。1939年6月13日の例会では、小崎の短歌「今日もまた独りこもりて縫物の針のはこびを楽しみてをり」が4位になっている。8月例会では、「何がなし足らぬ心が静まれる部屋にこもりて蟬の声きく」が第1位に、「住み合へば歎き語らふことさへも次第にうすれ今はまれなり」(⑩)が4位に入選した。

「なつかしき故郷の母の手紙にはわが病むことは書かざりにけり」(①)という歌からは、小崎

は台湾に来てから発病したことがうかがえる。「入院してはや幾年」にもなるのに母親にそのことを知らせていないのは、癩に対する世間の強烈な偏見のためだろう。1926年に発病した明石海人は、連作「診断の日」のなかで「人間の類を逐はれて今日を見る狙仙が猿のむげなる清さ」¹⁷という歌を残している。癩を患うのは「人間の類を逐」われることだという。こうした認識から彼女も自由ではありえなかった。

「人を避けこの昼過ぎをわれ一人炊事場に来て文書きにけり」とあるように、小崎はしばしば手紙のやりとりを短歌に詠んでいる。この歌は後述する『療養秀歌三千集』にも採用される。誰に宛てた手紙だろうか。病気のことを伏せたまま、台湾で無事に暮らしていると母親に書いているのかもしれない。しかし「久々の友のたよりよ強く強く生きて呉れよと書いて来にけり」(④)や「いつまでも心落すなと書かれたる友のたよりをくり返しよむ」(⑩)から、親しい友人は彼女の病気を知っていたことがわかる。異郷での隔離生活を強いられた小崎は、「友のたより」にどれだけ励まされただろうか。受け取った手紙を何度も読み返す楽しみは、「時たまに文がらなどを読みかへし一人楽しむこともありけり」(⑳)と表現されている。

「癩病みて月日経にけり今ははや癒ゆるとはわが思はずなりぬ」と詠んだように、治癒の望みを失いつつある彼女にとって、同病の友人との交流はますます大切なものになっていく。「病みつきでベットに臥るこの人」から「悲しき話」を聞くだけでなく、自分のことを語ることもあっただろう。気分の浮き沈みはあるものの、療養所の日々が暗黒に塗りつぶされていたわけではないのは、「友どちと過ぎし日のこと語りつゝ今日は楽しき時をすごせし」や「すこやかにありける頃を語りつゝ楽しかりしはひと時なりし」(⑨)などからうかがえる。時には「神経痛に悩める人の此の頃の明るき姿」に力づけられることもあった。「肉身の情にまさる療院の友の情に胸ぞせまれる」(⑦)には、病友の「情」のありがたさがストレートに表現されている。このような経験の積み重ねがあったからこそ、「晴れし日は心も晴れて浮きうきと病もつ身も何かたのしき」時もたしかに存在したのである。

1940年に少女寮長をつとめていた¹⁸小崎には、療養所の子どもを詠んだ短歌も多い。同年末の入所者は635人。そのうち5歳から15歳までの女子児童は18人である¹⁹。635人のうち内地人女性は19人で、台湾人女性は150人だった²⁰。この比率からすると少女寮の子どもも大部分は台湾人だったはずである。宮崎勝雄の「近頃覚へし国語あやつりて我をからかふ兒等は笑ましき」(『万寿果』第3巻第3号、1937年1月)や「子供等は今日来らざり枕辺にとり置きし菓子に蟻のつき居り」(『万寿果』第6巻第1号、1939年4月)のように、子どもを題材とした歌が『万寿果』に残されているが、小崎の作品数は突出している。

幼くして療養所に隔離された子どもたちを詠んだ彼女の短歌には次のようなものがある。「子等寄りて故郷の母の話など語り合ひ居り部屋隅にして」(⑤)、「年ゆかぬ子等の世話をばする度に親の気持となりて泣かるゝ」(⑫)、「育ちゆく子らがめつゝ故郷の妹をしのびて今日も過ぎしつ」(⑬)、「癒ゆるなき病も忘れ正月の晴着など出して子等の遊べり(病める子らを)」「癒えぬならば癒えずともよし今一度母のみもとに帰してやりたき」(⑮)、「世をさかり年毎に伸ぶ娘等愛しやがて世の苦を知ると思へば」「珍らしき今日の日和に子供等と軽き服着て山登りする」

「明るくも照る電燈の下にして子等の寝顔の無心なるかな」(⑳)、「灯の下に集ひて子等は声高く今日の学課をくり返し読む」(㉓)、「雛祭にぎはへるかも今日一日子等よ楽しくあそび暮らさな」
「癒ゆるなき病と思へばなほさらにいとしき募る癩を病む子に」(㉔) などだ。

あたかも姉か母親になったように「年ゆかぬ子等の世話をばする」姿が浮かんでほこないだろうか。子どもたちの「癒ゆるなき病」は小崎自身のものもあった。「やがて世の苦を知る」という沈痛な思いも、彼女が発病後に体験してきたさまざまな出来事が背景にあるのだろう。「癒えぬならば癒えずともよし今一度母のみもとに帰してやりたき」と詠んだとき、故郷に帰る望みもなくなった自らの境遇が頭をよぎったはずである。その一方で、育ち盛りの子どもたちとの山登りや雛祭りなどを楽しむひとときがあったことが、これらの短歌から伝わってくる。

小崎の短歌の多くは、泥沼化する日中戦争のただなかで詠まれた。しかし彼女が戦争を描くことはほとんどない。例外として1938年の「はからざる事変の中に迎へたる十五夜の月は冴え渡りたり」と「冴え渡る月夜の山路歩みつゝ思ひ及ぶは戦のこと」(㉕)の2首に「事変」や「戦」という語が使用されているだけだ。どちらも「冴え渡」る満月の清冽な美しさと「事変」「戦」が対比的に詠みこまれているが、彼女が戦争をどう考えていたのかはわからない。㉗の「紙上座談会」のように型どおりの発言を求められる場合を除いて、小崎の視線は療養所内部の日常生活に向けられていたようだ。

これらの歌から10年以上過ぎた1949年に、「病み古れど夢の如しもつつがなく戦ひの日を台湾に居りき」(㉘)という短歌を『山桜』に発表する。すべてが「夢の如」く過ぎ去った時点で創られた歌だが、これから述べるように、敗戦前後の年月はけっして「つつがなく」などと表現できるものではなかったのである。

内地人の男性入所者のなかには、戦争に参加できない後ろめたさを短歌で表現する者もいた。出征する職員を見送った心情を、吉川次郎は「徴兵の免除者悲し冷たきもの頬に覚えつゝ万歳叫ぶも」(『万寿果』第4巻第4号、1937年12月)と詠んでいる。1927年11月に公布された「兵役法施行令」は、癩者を「兵役ニ適セザル者」と規定していた²¹。佐久間南山の「聖戦に軍夫となりて働きし夢より覚めて汗ぬぐひけり」(『万寿果』第6巻第1号、1939年4月)には、兵士どころか軍夫にさえなれない現実を、夢からさめてつきつけられる姿が描かれている。

1940年12月、内田守人が編集した『療養秀歌三千集』が徳安堂書房から刊行された。ここには小崎の2首の短歌「人を避けこの昼過ぎを我一人炊事場に来て文書きにけり」「発車間際にかかけつけくれし叔母の姿今も我が目にありありとみゆ」(㉙)が収録されている。結核予防団体の白十字会を率いる村島帰之の依頼によって、同会の機関誌『白十字』に闘病短歌を連載していた内田守人は、癩や結核などの「宿病に直面して怯まざる逞ましき人間性を表現したる歌」を「療養短歌」と名づけるようになった。1939年4月に『療養知識』(『白十字』の後継誌)で全国の療養所に向けて「療養短歌」を募集したところ、400名を超える応募者があったという。2万首以上の応募作から選ばれたのが『療養秀歌三千集』である。楽生院からは、小崎のほか青山純三、梅田秀雄、佐久間南山、武田史郎の短歌が採用された。植民地の療養所に収容された彼らの作品が、この時はじめて内地の一般読者に届けられた²²。結核患者の作品が6割以上も占めて

いるのは、当時この病気が日本の死亡原因の一位だったためである。歌集が刊行された1940年の結核による死亡者は15万3154人にのぼっている²³。

特效薬がなかった当時、癩の発病から6年後の死亡率は7.5%、9年後には10%に達していた。療養所への収容は、平均して発病後5年だという²⁴。楽生院も開院から年月を経るにつれ、毎年多くの患者が亡くなるようになっていた。1941年の「一針々々運ぶ手を止めふと思ふ保つ命のこゝ幾年かと」（⑳）には、残された時間に思いをめぐらせる姿が描かれている。

小崎の叔父が台湾にいたことが、「病むわれを見るたびごとに涙する叔父の前にていふ言葉なし」「親のごとわれを気づかふこの叔父に報ゆることのかなはざる身か」（㉑）から読みとれる。何度も楽生院に面会に来る叔父の涙によって、彼女は自身の病状の悪化を思いしらされる。「親心ひたに思はるふるさとの母のたよりの今日も来にけり」（㉒）とあるように、この頃には故郷の母親にも病気のことは伝わっていたのだろう。

1943年10月、職員と患者の「奉仕作業」によって院内に納骨堂がつくられた。それまで「礼拝堂の隅つこに積み重ねられてゐた」「四百三十七柱の病友の遺骨は今こそ永遠の「憩の寐」を得た」²⁵のである。「先きだちし病友のみ骨をわかちもち納骨堂の丘にのぼりぬ」「四百のこゝに果てにし霊を守る納骨堂はいや静かなり」（㉓）が、楽生院時代の最後の作となった。

戦争が長期化するにつれ、楽生院では死亡者や逃亡者が増えていく。納骨堂が作られた1943年には67人（男58人、女9人）の入所者が死亡した。1943年の「年始現在数」（647人）と「本年収容数」（112人）の合計を分母（759人）とすると、この年の死亡率は8.8%になる²⁶。

これ以後のデータは1959年の『台湾省立楽生療養院年刊』に収録された「光復後歴年病人異動表」²⁷による。1944年度末の「留院数」（576人）に「本年度新収数」（62人）を加えた1945年の「本年度病人総数」は638人。死亡者は122人なので死亡率は19.1%にはねあがる。この年は73人の逃亡者もいた²⁸。これらの数字から戦時期の過酷な状況が理解できるだろう。内地の療養所も1945年の死亡率が最も高いが、マラリアと沖縄戦の被害が甚大だった宮古南静園（31.9%）と沖縄愛楽園（26.4%）が突出している²⁹。

戦時中に楽生院に入所した小倉溪水は、自伝のなかで「戦争が愈々苛烈になるに連れ沖縄から疎開した人々が、校庭や廟の庭などに藁を敷いてそこに起居するようになった為に集団伝染病が流行し、死亡者が続出した。……園内の患者も栄養失調のため死亡率が高くなり、自分自身も何時仆れるか判らないので、遺言状まで書いていつでも喜んで死ぬ覚悟をした」³⁰と述べている。沖縄からの疎開者がやって来た経緯は記されていないが、戦争は入所者の足元まで迫っていた。

1932年に沖縄で生まれ、44年に楽生院に収容された平良トヨミの証言をみてみよう。

（戦争が終わって）台湾の人なんかは日本時代はいじめられたから、今度は（台湾の人が）とつても怖かったよ。日本人に仕返するという意気込みであった。害は加えなかったけど、そのくらいの勢いで。

炊事するとき、（以前は）台湾人の所と日本人の所と分けてあったけど、それが戦争負けたとたんにつになつて。大変だったよ。早く取りに行かないと、掃除の水流されて、おひつ

に入ってしまったそうなくらいの勢いで、水を流すわけよ。いたずらしてるのか知らないけれど。だから私なんか一時間前には待っていて、(おひつにご飯を)入れたらすぐ取って逃げよった。怖かったよ。日本人に仕返ししたいからかな。怖かったよ³¹。

1945年12月10日、樂生院は台湾省衛生局の管轄下に置かれ、台湾省立樂生療養院となった。平良や豊見山が回想したように、療養所のなかの日本人と台湾人の立場も変化した。それは例えば炊事という具体的な場面で顕在化した。

さらに「国民党政府接收後、患者たちの生活は一気に困窮状態に陥っていく。……医療スタッフのみならず経費、医薬品にも事欠く事態に陥っている。スタッフ不足は深刻で、1946年5月時に特任、委託含め少なくとも43人が必要とされていた職員も13人しか満たせず、結果的に看護師不足は医療資格をもたない看護助手にやらせ、その他の仕事も臨時職員や雑役夫で埋め合わせていくしかなかった³²」という。

敗戦前後の樂生院を小崎は短歌に詠んでいないが、1946年12月の引揚げまでの日々を、日本人入所者はこうした厳しい状況のもとで過ごすことになる。

ここまで小崎治子の植民地時代の短歌を検討してきた。ところで小崎とはどのような人物なのだろうか。北條民雄のような著名な文学者と異なり、「無名」の彼女に関する情報はほとんど存在しない。ただ⑦の3首の短歌—「送りくる友に心をひかれつゝまた逢はむ日はなしと思へり(東京を去る)」「駅々の言葉のなまりなつかしく汽車の窓べにわがもたれ居り」「発車間際にかけつけくれし叔母の姿今もわが目にありありと見ゆ」—が、かすかな手がかりを与えてくれる。

最初の短歌は、台湾に渡る前に彼女が東京で暮らしていたことを示唆している。見送りに来た叔母は東京の近郊に住んでいたのではないだろうか。

内地と台湾を結ぶ航路は、神戸・大阪と基隆の間を就航していた。東京駅で友や叔母と別れた小崎は、西に向かう汽車に乗ったはずである。「駅々の言葉のなまりなつかしく」はとりわけ重要だ。駅に着くたびに聞こえてくる「言葉のなまり」を「なつかしく」聞く彼女の母語は、おそらく西日本の方言なのだろう。そうした「なまり」を「なつかしく」感じるところから、故郷を離れていた時間の長さをうかがうことができる。

第2節 敗戦から引揚げまで

植民地において特権的な立場を享受してきた在台内地人は、敗戦とともに「日僑と呼ばれる身分となった。……台湾の土地は日本の領土から離れ、日本人は外国たる台湾に僑居する者³³」になったのである。これからも台湾で生活できるのか、それとも日本に強制送還されるのか。正確な情報に接することのできない日僑は「心理的な方面の重圧が他の経済、物資の面の窮迫に先行」して、「デマ、ルーマーが雲の如く湧起つてゐるのに対抗が出来ない³⁴」状態に陥っていた。

池田敏雄の「敗戦日記」は、不安な日々を過ごす日僑の姿を、さまざまな「デマ、ルーマー」

とともに記録した貴重な資料である。1945年11月7日の日記には次のような一節がある。「樂生院（精神病院）の日人事務主任、殺害せられたり。原因は牛の密屠殺密告の嫌疑、不穏なるを察してバスで台北に逃れんとし、停留所で殺されたり。中国憲兵も同情しおれりと」³⁵。樂生院を精神病院とする基本的な誤記もあり、事件の真偽は確認できないものの、敗戦直後の混乱ぶりは伝わってくる。

台湾残留を希望した多くの日僑の願いもむなしく、1946年2月末には強制的な送還が始まった。留用される専門家とその家族を除き、軍人を含めて45万人余りがその対象となった³⁶。

台湾総督府の主計課長として「終戦事務」の第一線に従事した塩見俊二は、日僑送還直後の台北のようすを次のように記録している。「四月十日 街頭ニ日本人ノ影ガ消エタ。……新シイモノ生ム街程ノ活気ハ無ク、何トナク寂然タル思ヲスルノハ自分ガ日本人ナルノ故カ？然ラズカ？……四月十五日ヲ以テ台湾ニ於ケル日本的組織ハ送還其ノ他ノ使命ヲ終リ完全ニ潰滅ス。日僑送還ハココニ概ネ終了シ残留者ハ徴用者及其ノ家族ノミトナル」³⁷。

しかし「徴用者及其ノ家族」以外にも、「①病氣 ①接收未済 ①刑務所留置 ①其ノ他」に区分される「所謂潜伏日僑、新名残余日僑」³⁸が存在した。1946年3月に作成された「台中市日僑輸送管理站因病不能遣送之日僑名冊」³⁹には、肺結核や精神病、肝臓病などのために送還不能とされた日僑の名前が記録されている。

樂生療養院の入所者も「残余日僑」となった⁴⁰。「マツカーサー司令部ノ指令ニ基キ還送不能患者トシテ取扱ハレ」⁴¹たためである。1946年4月23日、台湾に留め置かれた「日僑癩患者」の苦境を元院長の上川豊は次のように訴えている。

省立樂生療養院に於ける患者の生活状況は総ての治療費並に諸給与等は官給であつて入院費は無料であります但其の給与されてゐる糧食は必ずしも満足すべき現状ではありません。従来米は一日二合余を支給されてゐますが副食物は極めて貧弱で時には、米飯に塩を振りかけて我慢する事も屢々で、元より病氣に対する栄養療法等云々さるべくもない実情であります。……

然るに右日僑患者は、其の家族や親戚等々既に日本に還送され自らは病苦に呻吟する身を独り取残されて留台の余儀なきに至り、今は早や島内に一人の身寄りもなく、金銭の仕送りは元より精神的慰問者も無く、罪なくして悲惨なる病魔に侵され異郷の癩院に独り淋しく配所の月を眺むるのであります。其の精神上物質上の苦痛は真に同情すべきであります⁴²。

上川の請願書からおよそ8ヶ月後の1946年12月、念願の引揚げがようやく実現することになった。「米国側ヨリ病院船ヲ配船還送ニ協力スル旨」⁴³の通知が中華民國に届いたのである。乗船前に「樂生院養神院入院患者ハ夫々各院ニ於テ四日間隔離検査」⁴⁴が求められた。養神院は台湾総督府が1934年に台北州七星郡に設立した精神病院である。伝染病ではない彼らに隔離検査が要求された理由は不明。ともあれ検査をおえた「樂生院ノ患者ハ乗船当日同院ヨリトラツク等ニテ病院船ニ直接輸送」⁴⁵され、12月20日に基隆港を出港した。病院船の名前は橘丸である。

上川豊の回想によると「船は途中、那覇港へ寄港した。ここで沖縄県人十八名が下船して、名護市在の愛楽園に入園した。内地、朝鮮の二十三名は、博多港に上陸、恵楓園からの迎いのバスで、熊本へ向かった」⁴⁶という。小崎治子の菊池恵楓園での療養生活はここから始まった。

引揚げに先立つ1946年9月、「救済関係者収容施設別名簿」が作成された。台北市保育院、台北市仁濟院、愛々寮、錫口療養院（前養神院）、樂生療養院の収容者である。樂生療養院に収容されていた41人のリストが、本名と年齢、住所とともに記載されている。「沖縄癩患者」は上川の記憶と異なり19人が正しい。内地人19人の名簿は以下の通り。

台湾協会の河原功氏によると、左の4人が女性入所者だという。前節では「駅々の言葉のなまりなつかしく汽車の窓べにわがもたれ居り」(⑦)という短歌から、小崎の母語は西日本の方言ではないかと推測した。東京の2人と年齢の合わない16歳の少女を除外すると、左から2人目の愛媛県出身者が残る。名簿が作成された1946年に数えて32歳ということは、1915年生まれである（名簿の年齢が数え年である根拠は後述する）。

1939年6月号の『万寿果』に掲載された「樂生歌壇の人々（続）」には、「現在居る人々で伊志井伸二君、宮崎勝雄君、女流で小崎治子さん。幸子さん等がある宮崎君をのぞく三君は何れも未だ若い人たちばかり」⁴⁸という一節がある。小崎が1915年生まれなら、当時は25歳になる。1939年の女性入所者182人のうち、5歳から25歳は61人。26歳から30歳までが24人、31歳から35歳までは23人、36歳以上は74人⁴⁹。当時の入所者の年齢構成からしても、25歳なら「未だ若い人」といえるだろう。

五	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	四九	五〇	五一	五二	五三	五四	五五	五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三	六四	六五	六六	六七	六八	六九	七〇	七一	七二	七三	七四	七五	七六	七七	七八	七九	八〇	八一	八二	八三	八四	八五	八六	八七	八八	八九	九〇	九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	九九	一〇〇	一〇一	一〇二	一〇三	一〇四	一〇五	一〇六	一〇七	一〇八	一〇九	一一〇	一一一	一一二	一一三	一一四	一一五	一一六	一一七	一一八	一一九	一二〇	一二一	一二二	一二三	一二四	一二五	一二六	一二七	一二八	一二九	一三〇	一三一	一三二	一三三	一三四	一三五	一三六	一三七	一三八	一三九	一四〇	一四一	一四二	一四三	一四四	一四五	一四六	一四七	一四八	一四九	一五〇	一五一	一五二	一五三	一五四	一五五	一五六	一五七	一五八	一五九	一六〇	一六一	一六二	一六三	一六四	一六五	一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	一七一	一七二	一七三	一七四	一七五	一七六	一七七	一七八	一七九	一八〇	一八一	一八二	一八三	一八四	一八五	一八六	一八七	一八八	一八九	一九〇	一九一	一九二	一九三	一九四	一九五	一九六	一九七	一九八	一九九	二〇〇	二〇一	二〇二	二〇三	二〇四	二〇五	二〇六	二〇七	二〇八	二〇九	二一〇	二一一	二一二	二一三	二一四	二一五	二一六	二一七	二一八	二一九	二二〇	二二一	二二二	二二三	二二四	二二五	二二六	二二七	二二八	二二九	二三〇	二三一	二三二	二三三	二三四	二三五	二三六	二三七	二三八	二三九	二四〇	二四一	二四二	二四三	二四四	二四五	二四六	二四七	二四八	二四九	二五〇	二五一	二五二	二五三	二五四	二五五	二五六	二五七	二五八	二五九	二六〇	二六一	二六二	二六三	二六四	二六五	二六六	二六七	二六八	二六九	二七〇	二七一	二七二	二七三	二七四	二七五	二七六	二七七	二七八	二七九	二八〇	二八一	二八二	二八三	二八四	二八五	二八六	二八七	二八八	二八九	二九〇	二九一	二九二	二九三	二九四	二九五	二九六	二九七	二九八	二九九	三〇〇	三〇一	三〇二	三〇三	三〇四	三〇五	三〇六	三〇七	三〇八	三〇九	三一〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	四九	五〇	五一	五二	五三	五四	五五	五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三	六四	六五	六六	六七	六八	六九	七〇	七一	七二	七三	七四	七五	七六	七七	七八	七九	八〇	八一	八二	八三	八四	八五	八六	八七	八八	八九	九〇	九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	九九	一〇〇	一〇一	一〇二	一〇三	一〇四	一〇五	一〇六	一〇七	一〇八	一〇九	一一〇	一一一	一一二	一一三	一一四	一一五	一一六	一一七	一一八	一一九	一二〇	一二一	一二二	一二三	一二四	一二五	一二六	一二七	一二八	一二九	一三〇	一三一	一三二	一三三	一三四	一三五	一三六	一三七	一三八	一三九	一四〇	一四一	一四二	一四三	一四四	一四五	一四六	一四七	一四八	一四九	一五〇	一五一	一五二	一五三	一五四	一五五	一五六	一五七	一五八	一五九	一六〇	一六一	一六二	一六三	一六四	一六五	一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	一七一	一七二	一七三	一七四	一七五	一七六	一七七	一七八	一七九	一八〇	一八一	一八二	一八三	一八四	一八五	一八六	一八七	一八八	一八九	一九〇	一九一	一九二	一九三	一九四	一九五	一九六	一九七	一九八	一九九	二〇〇	二〇一	二〇二	二〇三	二〇四	二〇五	二〇六	二〇七	二〇八	二〇九	二一〇	二一一	二一二	二一三	二一四	二一五	二一六	二一七	二一八	二一九	二二〇	二二一	二二二	二二三	二二四	二二五	二二六	二二七	二二八	二二九	二三〇	二三一	二三二	二三三	二三四	二三五	二三六	二三七	二三八	二三九	二四〇	二四一	二四二	二四三	二四四	二四五	二四六	二四七	二四八	二四九	二五〇	二五一	二五二	二五三	二五四	二五五	二五六	二五七	二五八	二五九	二六〇	二六一	二六二	二六三	二六四	二六五	二六六	二六七	二六八	二六九	二七〇	二七一	二七二	二七三	二七四	二七五	二七六	二七七	二七八	二七九	二八〇	二八一	二八二	二八三	二八四	二八五	二八六	二八七	二八八	二八九	二九〇	二九一	二九二	二九三	二九四	二九五	二九六	二九七	二九八	二九九	三〇〇	三〇一	三〇二	三〇三	三〇四	三〇五	三〇六	三〇七	三〇八	三〇九	三一〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	四九	五〇	五一	五二	五三	五四	五五	五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三	六四	六五	六六	六七	六八	六九	七〇	七一	七二	七三	七四	七五	七六	七七	七八	七九	八〇	八一	八二	八三	八四	八五	八六	八七	八八	八九	九〇	九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	九九	一〇〇	一〇一	一〇二	一〇三	一〇四	一〇五	一〇六	一〇七	一〇八	一〇九	一一〇	一一一	一一二	一一三	一一四	一一五	一一六	一一七	一一八	一一九	一二〇	一二一	一二二	一二三	一二四	一二五	一二六	一二七	一二八	一二九	一三〇	一三一	一三二	一三三	一三四	一三五	一三六	一三七	一三八	一三九	一四〇	一四一	一四二	一四三	一四四	一四五	一四六	一四七	一四八	一四九	一五〇	一五一	一五二	一五三	一五四	一五五	一五六	一五七	一五八	一五九	一六〇	一六一	一六二	一六三	一六四	一六五	一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	一七一	一七二	一七三	一七四	一七五	一七六	一七七	一七八	一七九	一八〇	一八一	一八二	一八三	一八四	一八五	一八六	一八七	一八八	一八九	一九〇	一九一	一九二	一九三	一九四	一九五	一九六	一九七	一九八	一九九	二〇〇	二〇一	二〇二	二〇三	二〇四	二〇五	二〇六	二〇七	二〇八	二〇九	二一〇	二一一	二一二	二一三	二一四	二一五	二一六	二一七	二一八	二一九	二二〇	二二一	二二二	二二三	二二四	二二五	二二六	二二七	二二八	二二九	二三〇	二三一	二三二	二三三	二三四	二三五	二三六	二三七	二三八	二三九	二四〇	二四一	二四二	二四三	二四四	二四五	二四六	二四七	二四八	二四九	二五〇	二五一	二五二	二五三	二五四	二五五	二五六	二五七	二五八	二五九	二六〇	二六一	二六二	二六三	二六四	二六五	二六六	二六七	二六八	二六九	二七〇	二七一	二七二	二七三	二七四	二七五	二七六	二七七	二七八	二七九	二八〇	二八一	二八二	二八三	二八四	二八五	二八六	二八七	二八八	二八九	二九〇	二九一	二九二	二九三	二九四	二九五	二九六	二九七	二九八	二九九	三〇〇	三〇一	三〇二	三〇三	三〇四	三〇五	三〇六	三〇七	三〇八	三〇九	三一〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	四九	五〇	五一	五二	五三	五四	五五	五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三	六四	六五	六六	六七	六八	六九	七〇	七一	七二	七三	七四	七五	七六	七七	七八	七九	八〇	八一	八二	八三	八四	八五	八六	八七	八八	八九	九〇	九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	九九	一〇〇	一〇一	一〇二	一〇三	一〇四	一〇五	一〇六	一〇七	一〇八	一〇九	一一〇	一一一	一一二	一一三	一一四	一一五	一一六	一一七	一一八	一一九	一二〇	一二一	一二二	一二三	一二四	一二五	一二六	一二七	一二八	一二九	一三〇	一三一	一三二	一三三	一三四	一三五	一三六	一三七	一三八	一三九	一四〇	一四一	一四二	一四三	一四四	一四五	一四六	一四七	一四八	一四九	一五〇	一五一	一五二	一五三	一五四	一五五	一五六	一五七	一五八	一五九	一六〇	一六一	一六二	一六三	一六四	一六五	一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	一七一	一七二	一七三	一七四	一七五	一七六	一七七	一七八	一七九	一八〇	一八一	一八二	一八三	一八四	一八五	一八六	一八七	一八八	一八九	一九〇	一九一	一九二	一九三	一九四	一九五	一九六	一九七	一九八	一九九	二〇〇	二〇一	二〇二	二〇三	二〇四	二〇五	二〇六	二〇七	二〇八	二〇九	二一〇	二一一	二一二	二一三	二一四	二一五	二一六	二一七	二一八	二一九	二二〇	二二一	二二二	二二三	二二四	二二五	二二六	二二七	二二八	二二九	二三〇	二三一	二三二	二三三	二三四	二三五	二三六	二三七	二三八	二三九	二四〇	二四一	二四二	二四三	二四四	二四五	二四六	二四七	二四八	二四九	二五〇	二五一	二五二	二五三	二五四	二五五	二五六	二五七	二五八	二五九	二六〇	二六一	二六二	二六三	二六四	二六五	二六六	二六七	二六八	二六九	二七〇	二七一	二七二	二七三	二七四	二七五	二七六	二七七	二七八	二七九	二八〇	二八一	二八二	二八三	二八四	二八五	二八六	二八七	二八八	二八九	二九〇	二九一	二九二	二九三	二九四	二九五	二九六	二九七	二九八	二九九	三〇〇	三〇一	三〇二	三〇三	三〇四	三〇五	三〇六	三〇七	三〇八	三〇九	三一〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	四九	五〇	五一	五二	五三	五四	五五	五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三	六四	六五	六六	六七	六八	六九	七〇	七一	七二	七三	七四	七五	七六	七七	七八	七九	八〇	八一	八二	八三	八四	八五	八六	八七	八八	八九	九〇	九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	九九	一〇〇	一〇一	一〇二	一〇三	一〇四	一〇五	一〇六	一〇七	一〇八	一〇九	一一〇	一一一	一一二	一一三	一一四	一一五	一一六	一一七	一一八	一一九	一二〇	一二一	一二二	一二三	一二四	一二五	一二六	一二七	一二八	一二九	一三〇	一三一	一三二	一三三	一三四	一三五	一三六	一三七	一三八	一三九	一四〇	一四一	一四二	一四三	一四四	一四五	一四六	一四七	一四八	一四九	一五〇	一五一	一五二	一五三	一五四	一五五	一五六	一五七	一五八	一五九	一六〇	一六一	一六二	一六三	一六四	一六五	一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	一七一	一七二	一七三	一七四	一七五	一七六	一七七	一七八	一七九	一八〇	一八一	一八二	一八三	一八四	一八五	一八六	一八七	一八八	一八九	一九〇	一九一	一九二	一九三	一九四	一九五	一九六	一九七	一九八	一九九	二〇〇	二〇一	二〇二	二〇三	二〇四	二〇五	二〇六	二〇七	二〇八	二〇九	二一〇	二一一	二一二	二一三	二一四	二一五	二一六	二一七	二一八	二一九	二二〇	二二一	二二二	二二三	二二四	二二五</
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------

ここでは小崎治子を愛媛県出身の女性と推定する。1915年生まれの彼女は東京生活の後に台湾に渡り、やがて癩を発病。おそらく1935年までには楽生院に入所した。その時、数え年で21歳前後。それから10年以上の年月を楽生院で過ごすことになる。彼女が戦前に詠んだ①から⑳の短歌は、23歳から30歳までの作品である。

第3節 菊池恵楓園時代

1946年12月、熊本の菊池恵楓園に引揚げた22名のなかに小崎治子も含まれていた。これ以後1949年に多磨全生園に転所するまでの間、彼女の短歌は残されていない。この時期の菊池恵楓園はどのような療養所だったのだろうか。

入所者の生活面に着目すると、1948年度から毎月100円の患者慰安金の支給が始まった。1949年度に200円、52年度には400円に増額されたものの⁵⁰、1948年の東京の小学校教員の初任給2000円（翌49年は3991円）⁵¹と比べると20分の1でしかない。この年の東京のカレーライスが50円、コーヒー1杯が20円である⁵²。慰安金自体は微々たるものだが、患者の絶滅によって癩問題の「解決」をめざした戦前とは異なる時代になったことを示すものだった。

慰安金以上に重要なのは特効薬プロミンの登場である。多磨全生園の光岡良二は「敗戦は患者を絶対主義の権力から精神的に解放し、プロミンは肉体的に病気の重圧から解放した。この二つの解放の基盤の上に患者と療養所の「戦後」が拓かれてゆく」⁵³と述べている。全国の療養所は大きな変化の時を迎えつつあった。

活発に繰り広げられた文化活動も「戦後」を象徴するものだった。菊池恵楓園の前身で1909年に設立された九州癩療養所（2年後に九州療養所と改称）は、早くから文学活動が盛んなことで知られていた。1924年に内田守人の指導のもとで結成された「檜の影短歌会」には、70名以上の会員が参加した時期もあったという⁵⁴。内田が1940年に刊行した『療養秀歌三千集』についてはすでに述べたが、彼は島田尺草や明石海人など多くの「癩歌人」の育成に携わった優れた短歌指導者であった。九州療養所（そして菊池恵楓園）で短歌の詠み手を輩出したのは、内田の存在が大きい。1927年6月に俳句・短歌誌として創刊された『黒土』は、翌年3月に『檜影』と改題する。その後も『草の花』や『暁鐘』などの雑誌が刊行されるが、1941年7月の国立移管に伴って『恵楓』に統合された⁵⁵。大東亜戦争ただなかの1943年3月、第17巻第3号を最後に中断。1947年11月に菊池恵楓園患者文化協会の機関誌として『檜影』が復刊した。

復刊号の巻頭言は、「今までの療養所といふものは余りにも伝統の殻に深くこもり過ぎ、世に正しい認識を克ち得る努力が少なかつたと思はれるのであるが、その為に社会の療養所観は旧来と比べ、少しも進んでいないようであり、かゝるへんけんを社会に植えつけたことの罪の一半は我々にあるといつていい。吾々は、吾々の生活をより明るくする為に一段の努力を拂うと共に、それらの明るさ、豊かさを認識してもらふよう社会に向かつてあらゆる機関を通じどしどし発表すべきである」⁵⁶と主張している。

患者文化協会は、文芸部・演芸部・体育部・図書部から構成され、文芸部の下に文学研究会・

まちに待つたお正月が来ました。祝賀式もすんでねんし廻りに行きました。それがすんで平和寮でかるた取りをしました。男の人も皆上つて遊びました。始めは「ばら」でしましたが、後では「げんぺい」ばつかりしました。一番上手なのは敦子さんです。敦子さん一人に四五人かゝつても、敦子さんにかんひません⁶¹。

「敦子さん」を雪子に置き換えれば「童謡作家」の記述とほぼ符合する。小説の山場は子どもたちが出演する学芸会の演劇シーンだ。日本語の科白をうまく話せない台湾人児童を乙部は気遣うが、雪子の協力によって劇を成功に導く。ふたりの仲が急接近するところで小説は結末を迎える。

当時の楽生学園を熟知していなければ書けない作品だ。1921年7月に台湾で生まれた西羽四郎は、「学生時代に発病、友人たちの冷たい目に刺される思いで一九三八年二月長島愛生園に入所」⁶²し、戦時中に楽生院に転院。この小説で、彼は自身と同じ湾生を主人公に設定したのである。現存する最後の『万寿果』（1944年1月、第10巻第2号）にも、西羽は「楓蔭学園」「朝に寄す」という詩と童謡組曲「秋の鶏舎」を発表している。戦後は小崎治子らとともに菊池恵楓園に引揚げ、患者自治会の機関誌『菊池野』の編集に参加した。愛生園時代に書き始めた詩は大江満雄に高く評価され、大江が編集した『いのちの芽——日本ライ・ニューエイジ詩集——』（三一書房、1953年）にも収録されている。戦時期の楽生院を題材とした「童謡作家」も、植民地台湾の記憶を描いた「引揚げ文学」といえるだろう。

図1の「救済関係者収容施設別名簿」をもう一度みてみよう。左から5人目の「岡山県邑久郡裳掛村大字虫明□□□□」は長島愛生園の所在地だ。彼が西羽四郎だろう。1921年生まれの西羽が46年に作成された名簿に26歳と記されている。このことから、名簿の年齢は数え年であることがわかるのである。

第4節 多磨全生園時代

1949年7月以降、小崎治子の短歌が『山桜』に掲載されるようになった（②⑦～③⑥）。それでは彼女はいつ全生園に転所したのだろうか。

『菊池恵楓園50年史』の「患者異動表」には、1909年の設立から58年までの半世紀におよぶ入所者の異動が記録されている。退所者は「軽快」「転所」「逃走」「その他」「死亡」に分けられる。1945年以降の女性入所者の「転所」は49年に1人、その次が54年の4人である⁶³。1952年3月の雑誌『武蔵野』に収録された「武蔵野短歌会同人録」に小崎の名前も載っているのも、彼女の転所は49年ということになる。

1944年7月号を最後に休刊していた全生園の『山桜』は46年4月に復刊された。復刊号はわずか16頁だが、徐々にページ数を増やしていく。「昭和二十四年に入ると、「山桜」は俄に厚くなり、三、四十頁を常態とするようになる。……俳句欄は二十三年八月号から斎藤俳小星の雑詠選が復活し、短歌欄でも二十四年七月号から「アララギ」の五味保義の選歌が始まるように



図3 「武蔵野同人録」(『武蔵野』第3号、1952年3月)

な]⁶⁴っていた。

この『山桜』を舞台として、「(*昭和：引用者) 24年のプロミン獲得運動から28年の予防法闘争にかけての政治的な高揚期に合わせて、文芸活動も、量的にも質的にも、かつてない高まりを見せた。23年秋に多磨創作会(会長厚木勲)が結成され、24年初頭には全生詩話会が戦前の会名をついで再結成された。……すべてがルネッサンスと呼びたいひとつの高揚した気分を共有していた]⁶⁵という。

1949年に小崎治子が転所してきた時、全生園はこのような雰囲気につつまれていた。

引用文にある「24年のプロミン獲得運動」については説明が必要だろう。

前節で「戦戦は患者を絶対主義の権力から精神的に解放し、プロミンは肉体的に病気の重圧から解放した。この二つの解放の基盤の上に患者と療養所の「戦後」が拓かれてゆく」という光岡良二の文章を紹介した。もう少し引用を続けよう。

ハンセン氏病をながい不治の暗黒から、可治の病に変えたきっかけとなったものは、プロミン、DDS等のスルフォン剤による治癒効果の革命的なめざましさであった。プロミンが日本の癩院で試験的に使用され始めたのは昭和二十三年であった。その試用を受け得る患者数は限定されており、しかもプロミン治療を受ける療友が目に見えて病症が軽快してゆくの、結節やその壊瘍の傷に苦しみ、咽頭狭窄におびえる結節癩の病型の患者達は、その試用者の狭い門に受け入れられようと、担当医に訴える列が毎日のように作られた。……

この治療効果の著しい新薬プロミンを国費で希望者全員がその治療を受けられるように運動しようではないかという声が患者有志の中から起こり、自治会も応援して「プロミン獲得促進委員会」というものが組織された。……

結局、「促進委員会」の要求は全面的に受け入れられ、プロミン予算は復活し、昭和二十四年度からプロミン治療が全国の療養所で実施されることになった。このプロミン獲得促進の運動は、全生園の患者が経験した最初の組織的な患者運動であった⁶⁶。

全生園の「高揚した気分」は、特効薬による治癒への希望に裏づけられていた。1949年に入ると『山桜』の短歌欄にはプロミンを詠んだ作品が続々と登場するようになる。

プロミン治療受くる誰れ彼れをともしみぬ病もおほかた我より軽く 山岡響
 プロミン注射施す者の選定に園長を非難する声もきくなり 大津哲緒
 もの売って買ひし薬を打ち終りあと続かぬと嘆けるもあり 全
 かくしてや癒ゆる病と疑はず命繋ぐるに薬を賜へ（断食） 花岡志伸
 断食の行きすぎを言へど千余名の九割に未だプロミンの無き 水戸鎮夫
 プロミンに傷いえし身の安らぎに人知れず泣きし日を思ふなり 竹下道子⁶⁷

全国各地の療養所で繰り広げられたプロミン獲得促進運動は、創作の格好の題材となった。邑久光明園慰安会の機関誌『楓』は、1949年7月号でプロミンを詠った川柳を掲載している。

プロミンに指のない手がかなしまれ 山川夢草
 プロミンに合掌すと母の仮名便り 牧岡秀人
 プロミンが出来て結婚一ト思案 浅田湖月
 プロミン騒ぎ薬屋ほくそゑみ 浅田湖月
 プロミンに夜毎の夢は子を抱き 高崎あつし⁶⁸

1949年に全生園に移った小崎治子は、その年から52年にかけて22首の短歌を『山桜』に発表している。短歌欄の選者は恵楓園の『檜影』と同じく五味保義が担当した。偶然かもしれないが、彼が『山桜』の選者に就任した1949年7月号から、小崎の短歌が掲載されるようになった。

22首のうち小崎がプロミンを題材にしたのは「プロミンの効果よろしと十グラム射つ人のあり体格は良く」(30)と「プロミンを断念したる身には只大楓子油を確実にうつ」(34)の2首である。30からは小崎が体格に恵まれなかったことが想像される。特効薬とはいえプロミン治療を受けた患者のなかには、貧血や斑紋、熱瘤や結節の増加などの副作用が強くなるケースもあったという⁶⁹。長年この病に苦しんできた小崎には耐えられなかったのかもしれない。「プロミンを断念した」彼女は、戦前から使われてきた「大楓子油」にすぎるしかなかったのだ。

全生園に転所した1949年に、小崎は数え年で35歳になっていた。この年の8月に「素直なりと言はれし頃も病みて経しいつしかにわが心老い行」(28)と詠んでいる。回復の見込みのない長患いのためか、35歳にして心がすでに「老い」てしまったという。楽しい時もあった楽生院時代とは異なり、今では「つつがなくすぎし一日の夕暮に汗ぬぐひつつ涙こぼるる」(30)ほど

になっている。

プロミン治療に浮き立つ周囲をよそに、小崎は台湾の記憶を反芻した短歌をほそぼそと詠んだ。「病み古れど夢の如しもつつがなく戦ひの日を台湾に居りき」(28)、「癒えがたき病と知りて台湾に渡りゆきしが帰る事なき」(31)、「相会ふも永久に無からむ住み良かりし台湾去りて五年は過ぎ」「再びは渡る事なき台湾の絵葉書手にして語るも懐かし」(33)、「儂みし事もなくなり終戦の台湾偲びぬ吾引揚げし今日」(36)である。台湾を題材とした5首の短歌は、22首のうち4分の1弱を占める。

③1は楽生院で亡くなった友人を詠んだのだろうか。癩を患ったことを知りながら台湾に向かうのは、内地に住む家族や知人たちから逃れるためかもしれない。

これ以外の4首に詠まれた台湾の日々は懐かしさにあふれている。まるで楽生院では辛く悲しい体験などなかったかのようだ。プロミン治療を断念し、全生園の「高揚した気分」にもなじめない彼女には、けっして戻ることのできない台湾の生活が「住み良かりし」ものに思えたのではないだろうか。『万寿果』に寄せた短歌で表現したように、まだ若かった小崎にとって、隔離を強いられたとはいえ、入所者や子どもたちとのさまざまな思い出のある場所だったのである。

小崎をペシミスティックにしているのは、親しかった叔母との関係の変化もあるのかもしれない。東京を離れる時に駅まで駆けつけてくれた叔母の姿は、楽生院に収容された小崎にとって大切な記憶となっていた（「発車間際にかけつけくれし叔母の姿今もわが目にありありと見ゆ」「別るゝ時泣き居し叔母のその姿手紙よみ居れば目にうかび来る」(7)）。彼女が菊池恵楓園から全生園に移った理由はわからないが、東京近郊に住んでいる叔母の存在は意識していたと思われる。

全生園に移った翌年の夏に、「叔母春に来るとの知らせあるままに姿便りも絶へて久しき」(32)という短歌を詠んでいる。東京駅で別れた時、小崎は発病していなかった。それから20年近くの歳月が流れ、癩者となってふたたび東京に戻ってきた彼女を、叔母はどのように迎えることができたのだろうか。特効薬が登場したとはいえ、世間の人々のこの病に対する差別意識はなおも強固なものだった。頼りにしていた叔母から避けられているのではないかと感づくのは、さぞかし寂しいことだっただろう。

小崎の最後の短歌は、1952年10月号の「儂みし事もなくなり終戦の台湾偲びぬ吾引揚げし今日」と「代筆を吾に頼みし盲ひの人にすまぬと思ひつ作業にゆきぬ」(36)である。これ以後、彼女の名前は『山桜』から消えてしまう。

1953年3月、多磨全生園武蔵野短歌会の『歌集 木がくれの実』が岩波新書として出版された。収録作品は1377首。短歌会の会長である鈴木楽光によれば、1949年に全生園が開設40周年となることを記念する行事の一環として企画されたものだという。「小冊子ではあるが会員たちには晴れがましい出版であった。題名の『木がくれの実』も、楽光たちが、七、八年も前から決めて温めていた題であった。六八人の作品を収めた。予防法闘争のさなかの出版であるが、ここにはまだ、そうした熱い現実はそのほどは反映していない⁷⁰と『俱会一処』は記述している。

この歌集に小崎治子の短歌は収録されなかった。「年代的に、昭和九年長崎書店より当時の物故会員の作品を集めて刊行された小歌集「曼珠沙華」を境とし、それ以後の故人を含めた全会員

を対象としながらも、「歌壇のそれぞれの結社誌に所属している会員」⁷¹の作品から選ばれたためである。図3の「武蔵野同人録」に示されているように、小崎治子はどの結社にも参加していなかったのだ。

おわりに

本論文は小崎治子という「無名」の癩者に焦点をあて、彼女が創作した短歌を分析してきた。若くして癩を患った小崎は、10年以上の年月を植民地台湾の療養所で暮らした。敗戦前後の過酷な時期を経て菊池恵楓園への引揚げを体験し、やがて多磨全生園へと転所した。特効薬プロミンの出現に沸く全生園の「高揚した気分」のなかで、台湾への郷愁を織りこんだわずか5首の「引揚げ文学」を、彼女はひっそりと書き残したのである。

宮崎勝雄の作品と同じように、彼女の短歌が台湾文学研究において注目されることはなかったし、これからもそうだろう。優れた短歌を残した明石海人や伊藤保、津田治子とは異なり、ハンセン病文学研究でも「無名」の存在であり続けるはずだ。

論文を締めくくるにあたって、明るい色彩をとどめた戦後唯一の短歌を紹介したい。「部屋の前に咲きし水仙の黄の色は畑を照らす如くあかるし」(㉓)。1950年6月号の『山桜』に掲載されたものである。

注

- 1 五味保義選「短歌」『山桜』第31巻第8号、1950年8月、19頁。
- 2 光岡良二・木谷花夫選「短歌」『山桜』第33巻第10号、1952年10月、21頁。
- 3 星名宏修「植民地台湾の「癩文学」を読む——宮崎勝雄のテキストを中心に——」『日本台湾学会報』第21号、2019年7月。
- 4 ハンセン病患者への「聞き取り」を行ってきた蘭由岐子は、『異口同音』の『異口』に着目し、「病者ひとりひとりがハンセン病という病いを生きたそのことの意味を「ひとまとめ」(好ましくない表現を使うとすれば、「十把一絡げ」)にせず、病者個人のおおの経験に降り立ち、その細部を「異口」のまま残すことの重要性を説いている。蘭由岐子『「病いの経験」を聞き取る [新版]』生活書院、2017年、80頁。
- 5 朴裕河「「引揚げ文学」を考える——序にかえて——」『引揚げ文学論序説』人文書院、2016年、10-19頁。
- 6 星名宏修「植民地台湾の「癩短歌」を読む——楽生院慰安会『万寿果』を中心に——」(『野草』第百号)編集委員会編『中華文藝の饗宴——『野草』第百号——』研文出版、2018年)、星名宏修『「療養短歌三千集」を読む』(立命館文学人文学会『立命館文学』第667号、2020年3月)。
- 7 「収容患者定員及現在数」『昭和五六年統計年報』台湾総督府楽生院、1933年、7頁。
なお本論文で引用する『楽生院年報』は、すべて近現代資料刊行会の復刻版(『植民地社会事業関係資料集〔台湾編〕』、2000年)による。
- 8 芹澤良子『帝国日本の台湾統治とハンセン病』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文、2012年、194頁。
- 9 澤野雅樹『癩者の生——文明開化の条件としての——』青弓社、1994年、88頁。
- 10 上川豊「内台癩病観の異同」『社会事業の友』第67号、1934年6月、18頁。
- 11 柴山武矩「楽生院歌人」『社会事業の友』第104号、1937年7月、76頁。
柴山武矩の『万寿果』への関わりについては、注6の「植民地台湾の「癩短歌」を読む」を参照のこと。
- 12 「楽生短歌会」『万寿果』第6巻第1号、1939年4月、16頁。
- 13 「収容患者定員及現在収容人員」『昭和十年年報』台湾総督府癩療養所楽生院、1936年11頁。

- これ以前のデータは『昭和五、六年統計年報』の「収容患者定員及現在数」（台湾総督府楽生院、1933年、7頁）しか残されておらず、そこに記載された1931年末時点では内地人女性の入所者はいない。
- 14 「教育程度別調査表（昭和十年末）」同上『昭和十年年報』、29頁。
- 15 松岡秀明「ハンセン病と短歌—映画〈小島の春〉をめぐる—」『Communication-Design』12、2015年3月、44頁。
- 16 前掲「楽生短歌会」、16頁。
- 17 村井紀編『明石海人歌集』岩波書店、2012年、13頁。
- 18 1940年2月に刊行された『万寿果』に掲載された「皇紀二千六百年を迎えて 職員入院 紙上座談会」(17)に、小崎治子は少女寮長として「私達もとへ身は病でありましても悠久にして且つ光輝ある皇国日本の歴史を顧み皇祖肇国の御偉業を偲びまつると共に一層敬心の心を厚くし社会の為にも、療院の為にも自戒し、輝く二千六百年を意義あらしめねばならないと思ひます」という文章を寄せている。『万寿果』第7巻第1号、1940年2月、8頁。
- 19 「現在患者病型年齢別表（昭和十五年末現在）」『昭和十五年年報』台湾総督府癩療養所楽生院、1941年、46頁。
- 20 「現在患者本籍地別表」、同上「現在患者病型年齢別表（昭和十五年末現在）」、41頁。
- 21 国立公文書館デジタルアーカイブ、2020年8月1日確認。https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/Detail_F0000000000000030714
- 22 星名宏修、前掲「『療養短歌三千集』を読む」を参照のこと。
- 23 福田真人『結核の文化史—近代日本における病のイメージ—』名古屋大学出版会、1995年、50頁。
- 24 『台湾の癩根絶策に就て』財団法人台湾癩予防協会、1935年、11-12頁。
- 25 柿くけ子「俱会一処」『万寿果』第10巻第2号、1944年1月、6頁。
楽生院の最後の統計は1944年11月に刊行された『昭和十八年年報』である。同書の「収容患者異動表」によると、1930年12月の開院から43年末までの延べ収容者は1522人（うち内地人は144人）。この13年間に「死亡シタル者」は450人である。「収容患者異動表」『昭和十八年年報』台湾総督府癩療養院楽生院、1944年、23-25頁。
- 26 同上「収容患者異動表」、23-24頁。
死亡率の算出方法は、清水寛の「全国の国立ハンセン病療養所における太平洋戦争期・敗戦直後の入園者の死亡数・死亡率の年次推移」に従った。『太平洋戦争下の国立ハンセン病療養所—多磨全生園を中心に—』新日本出版社、2019年、65頁。
- 27 「光復後歴年病人異動表」『台湾省立楽生療養院年刊』省立楽生療養院、1959年、11頁。
- 28 范燕秋「台湾的美援医療、防癩政策変動與患者人権問題、1945至1960年代」国立台湾師範大学台湾史研究所『東亞近代漢生病政策與医療人権国際検討会論文集』、2010年、184頁。
- 29 清水寛、前掲書、67頁。
- 30 小倉溪水『瀬戸のあけぼの』基督教文書伝道会、1959年、181頁。
- 31 平良トヨミ「八重山から台湾へ」『沖縄県ハンセン病証言集 沖縄愛楽園編』沖縄愛楽園自治会、2007年、211頁。
1943年に楽生院に入所した豊見山一雄も、内地人と台湾人の待遇の差が敗戦後には一変したことを指摘している。「戦争中はね療養所の中でも、やっぱり、生活の差があったんじゃないかな。……本土の人たちはね、台湾の人たちを相当蔑んで見ていたからな。それが終戦と同時にがらりと変わったんだよ。炊事も一緒になり、台湾の人たちの食事が主になって、僕なんかにしたらもう口に合わんわけだ。食事はもう、療養所の中では一つになって、食べ物というのは、向こうの人たちが好むようなものをやるわけよ」。豊見山一雄「台湾で発病、楽生院に収容」『沖縄県ハンセン病証言集 宮古南静園編』宮古南静園入園者自治会、2007年、206頁。
- 32 城本るみ「台湾の戦後混乱期と楽生療養院—1950～1960年代を中心として—」（『人文社会論叢 社会科学篇』第30号、弘前大学人文学部、2013年8月、97頁。
- 33 「日僑の追憶—終戦後引揚迄の日本人の生活と其の後の台湾—」『日本人の海外活動に関する歴史的調査』通巻第17冊台湾篇第6分冊の1、2、大蔵省管理局、1頁。ゆまに書房の復刻版第9巻（2000年）を使用した。
- 34 同上「日僑の追憶」、3頁。
- 35 池田敏雄「敗戦日記」『台湾近現代史研究』第4号、1982年10月、94頁。
小倉溪水も「楽生院の職員某は本島人患者から憎まれて居たので、本島人、職員の煽動による暴徒に襲われて袋叩きにされ、台北病院に担ぎ込まれたが数時間後、死んでしまった」と記述している。「敗戦日記」の事件との関連は不明だが、従来の秩序が崩壊するなかで、楽生院でも内地人に対する憤懣が爆発した事例はあったと思われる。小倉溪水、前掲書、183頁。
- 36 若林正丈「池田敏雄「敗戦日記」解題」、前掲、池田敏雄「敗戦日記」、56頁。
- 37 塩見俊也『秘録・終戦直後の台湾—私の終戦日記—』高知新聞社、1979年、105-108頁。

- 38 同上書、137-138頁。
- 39 「台中市日僑輸送管理站因病不能遣送之日僑名冊」『政府接收台湾史料彙編』上冊、国史館、1990年、492-494頁。
- 40 楽生院からの引揚げに関しては、中村春菜の博士論文「戦後台湾における「沖繩籍民」の引揚げの諸相」（琉球大学人文社会科学部研究科、2018年）の「第3章 沖繩籍民の引揚げパターン」「第6節 病院船引揚げ」に詳しい記述がある。
- 41 速水国彦「留台日僑癩患者還送方ノ件」『留台日報第二報』1946年4月。引用は河原功監修・編集『台湾協会所蔵 台湾引揚・留用記録』第1巻、ゆまに書房、1997年、35頁より。
- 42 上川豊（前台湾総督府癩療養所楽生院長・現台湾省立楽生療養院服務員）「留台日僑癩患者救済に関する請願」。速水国彦、同上「留台日僑癩患者還送方ノ件」への添付資料。引用は38-39頁。
- 43 周一鶚「台湾省日僑管理委員会公告 僑管字第3994号」1946年12月6日、引用は『台湾協会所蔵 台湾引揚・留用記録』第4巻、ゆまに書房、1997年、29頁。
- 44 速水國彦（留台日僑世話役）「留台日第七〇七号 病患者ノ還送ニ関スル件」、1946年12月4日。引用は同上、『台湾協会所蔵 台湾引揚・留用記録』第4巻、35頁。
- 45 速水国彦、同上「留台日僑癩患者還送方ノ件」。引用は『台湾協会所蔵 台湾引揚・留用記録』第4巻、36頁。
- 46 上川豊「ハンセン病者を守って」『台湾引揚史』財団法人台湾協会、1982年、65-67頁。下線は引用者。
- 47 『「留台日第十報」添付資料』第五「救済関係者収容施設別名簿」『台湾協会所蔵 台湾引揚・留用記録』第3巻、ゆまに書房、1997年、104-105頁。
この名簿の存在は台湾協会の河原功氏のご教示による。台湾協会が保管している原本には本名と住所が記されているという。
- 48 蘇月生「楽生歌壇の人々（続）」『万寿果』第6巻第2号、1939年6月、41頁。下線は引用者。
- 49 「現在患者別年齢別表」『昭和十四年年報』台湾総督府癩療養所楽生院、1940年、38頁。
- 50 国立療養所菊池恵楓園『百年の星霜——菊池恵楓園創立百周年記念誌〔第二部〕——』、2009年、135頁。
- 51 週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』朝日新聞社、1988年、92頁。
- 52 同上書、40頁、77頁。
- 53 光岡良二「書誌・「多磨」五十年史」『ハンセン病文学全集』第5巻、皓星社、2010年、728頁。
- 54 国立療養所菊池恵楓園自治会「文化」『自治会50年史』1976年、166頁。
- 55 国立療養所菊池恵楓園入所者自治会「文芸誌」『壁をこえて—自治会八十年の軌跡—』、2006年、120頁。
- 56 「現代の世相と『檜影』」『檜影』第21巻第6号、1947年11月、1頁。
- 57 「座談会『恵楓園の文芸』を語る」『檜影』第24巻第4号、1949年10月、11頁。
- 58 西羽四郎「創作 童謡作家」『檜影』第23巻第4号、1948年10月。
- 59 1941年に台湾総督府は「台湾教育令」を「国民学校令」に改定し、小学校と公学校は国民学校となった。1942年から国民学校国民科では新たな国語読本として『コクゴ』の使用が始まった。周婉窈・許佩賢「台湾公学校與国民学校国語読本総解説」台湾教育史研究会『日治時期台湾公学校與国民学校 国語読本 解説・総目録・索引』南天出版社、2003年、14-41頁。
- 60 志能鏞川・桑田紀行「特殊病院訪問記（一）—更生院と楽生院—」『台湾警察時報』第273号、1938年8月、124頁。
- 61 小川セツ子「かるた取り」『万寿果』第9巻第1号、1942年5月、46頁。傍点は原文。
- 62 『ハンセン病文学全集』第6巻、皓星社、2003年、482頁。西羽四郎については、国立ハンセン病資料館の木村哲也学芸員からご教示いただいた。記して感謝したい。
- 63 「患者異動表」『菊池恵楓園50年史』国立療養所菊池恵楓園、1960年、194頁。
- 64 光岡良二、前掲論文、735頁。
- 65 多磨全生園患者自治会編『俱会一処——患者が綴る全生園の七十年——』一光社、1979年、195頁。
- 66 光岡良二、前掲論文、724-725頁。
- 67 前掲、光岡良二「書誌・「多磨」五十年史」、728頁。
- 68 高田冠齊選「川柳（プロミン）」『楓』第3巻第3号、邑久光明園慰安会、1949年7月、31頁。
- 69 沖健二「私の歓喜」、島津卓郎「最初にプロミンを打つた私」『癩の新薬プロミン』国立多磨全生園内プロミン獲得促進委員会、1949年、12-15頁。引用は『近現代日本ハンセン病問題資料集成（戦後編）』第1巻、不二出版、2003年より。
- 70 多磨全生園患者自治会編、前掲書、196-197頁。
- 71 鈴木楽光「まえがき」多磨全生園武蔵野短歌会編『歌集 木がくれの実』岩波書店、1953年、iii - vi頁。

【付記】

本論文は JSPS 科研費 (18K00347) 「日本植民地期の台湾におけるハンセン病文学に関する基礎的研究」の助成を受けた。

(2020 年 10 月 14 日投稿受理、2021 年 1 月 14 日採用決定)